

信 毎 俳 壇

今 井 聖 選

春愁や黒のグロスのレディガガ

いぬふくり誰かうしろにゐたやうな

山菜莖の花や面白がる取り柄

啓蟄や母の遺影も庭覗く

路味喰や座土神の腰豊か

古井戸を覗きもしたる梅見かな

暖かや一枚腕いでドライヤー

雨響れて春相聞の戸を叩く

春めくや見つかるやうにかくれんぼ

花シモザワマン電車加速せり

朝刊に泥窓巻いてしまひけり

スクランブルエッグつややか春時雨

(塩尻市) 百瀬 はな
(千曲市) たじまたける
(佐久市) 西田 和彦
(飯山市) 小野沢竹次
(長野市) 萩原 宏祐
(箕輪町) 向山 政俊
(千曲市) 関 津和子
(上田市) 田名綱 剛
(安曇野市) 丸山 進也
(松本市) 伊藤 和夫
(塩尻市) 小村 勝子
(佐久市) 佐藤 勝子

選評

一句目、レディー・ガガは現代アメリカを代表するシンガーソングライター。前衛的なファッションでも知られる。ガガの黒い口紅の艶を目にして作者は同性として複雑な思いに駆られている。二句目、

春の大地にはさまざまな「気配」が薫く。三句目、「面白がる」特徴も取柄であると、作者はやや皮肉な目で知人を眺めている。四句目、遺影の視線が庭に向いたような気がする。啓蟄の候である。

神野 紗希 選

鉄融かす炉から火の香や春の雪

「立春」と書けば日記も嬉しきや

舞音のポロネーゼ岸若葉添へ

杉花粉たまたま中へむつき捨て

鶉色の白寿の夢や日脚伸ぶ

母の手の土の匂ひやはうれん草

うめのはなみんとのはみがきこがらい

七谷を埋め尽せり春霞

生きたいか 過去帳にない難に雨

退院のまずは鯖の一夜十し

古羅と身肉の如く語りけり

立漕ぎの手の頬紅し草萌ゆる

(須坂市) 富田 孝弘
(飯山市) 小野沢竹次
(佐久市) 竹内 勝代
(千曲市) 関 津和子
(安曇野市) 小坂るり子
(長野市) 福沢 ナナ
(中野市) 風間 一乃
(飯田市) 大石 昭重
(千曲市) 田中 らめ
(長野市) 斎藤 俊幸
(上松町) 堀川 悦子
(安曇野市) 堀部 明晃

選評

一句目、炉の熱さと雪の冷たさの対比に、今この瞬間がいきいきと匂い立つ。鉄が融け雪も解け、エネルギーが混然と循環する存だ。二句目、立春を迎えたうれしさを日記も喜んでいのか。心が

じんわりあたたかくなる。三句目、香り高い一皿。摘んできた芹の若葉を散らせば、パスタも一気に春めく。四句目、杉花粉もおむつも、この世を構成するもの。美しいだけではない現実を確かに捉えた。

坊城 俊樹 選

啓蟄や厨に動く貝の舌

地震のあといちのち一途の草頭ゆる

卒業生一同起立してジャンプ

分校の瞳三十ふきのたう

寒鴉胡桃ひとつを落とすけり

如月の病候診や空をみる

家業継ぐ子の肩先に風光る

冬の夜父と星座の話しなど

老いて尚余日またまた野に遊ぶ

雛の忌や官女へそそぐ夕日差し

春泥や少女ひらりと赤い靴

寒紅をきりりと引きて投票へ

(長野市) 白鳥 寛山
(塩尻市) 神戸 千寛
(佐久市) 竹内 勝代
(長野市) 山田登志夫
(小諸市) 佐藤ゆきな
(佐久市) 笠原 礼子
(安曇野市) 丸山 進也
(須坂市) 小山 重征
(大桑村) 木戸口信幸
(飯山市) 田中 琢雄
(安曇野市) 石田 美紀

選評

一句目、季節の「啓蟄」と見事に調和した句。台所に調理する貝もまた生きている。その舌に注目したところにリアルな生命観がある。二句目、地震の後もまた草が萌え出する。そんな小さな生命の愛お

しさに着目した。一途という言葉に打たれるものがある。三句目、このような光景を見たことがあるような。この一瞬を写真に収めるのだろうか。青春の旅立ちとはまさにこの瞬間にあるのだろう。